

## 報告

### コミュニケーション教育をベースとしたプロフェッショナルリズム教育

The Professionalism education based on the communication education

木尾哲朗<sup>1)</sup>、永松 浩<sup>1)</sup>、鬼塚千絵<sup>1)</sup>、大住伴子<sup>2)</sup>、田中 宗<sup>1)</sup>、森川和政<sup>3)</sup>、西原達次<sup>4)</sup>

Tetsuro Konoo<sup>1)</sup>, Hiroshi Nagamatsu<sup>1)</sup>, Chie Onizuka<sup>1)</sup>, Tomoko Ohsumi<sup>2)</sup>, Hajime Tanaka<sup>1)</sup>,  
Kazumasa Morikawa<sup>3)</sup> and Tatsuji Nishihara<sup>4)</sup>

九州歯科大学歯学部 総合診療学分野<sup>1)</sup> 口腔応用薬理学分野<sup>2)</sup>  
口腔機能発達学分野<sup>3)</sup> 感染分子生物学分野<sup>4)</sup>

1) Division of Comprehensive Dentistry, 2) Applied Pharmacology, 3) Developmental  
Stomatognathic Function Science and 4) Infections and Molecular Biology,  
School of Dentistry, Kyushu Dental University,

医療コミュニケーション教育は歯科医学教育のグローバルスタンダードとなっているが、日本における歴史は浅く、国内の多くの歯科大学・歯学部では 2006 年に正式実施となった共用試験 OSCE に伴って導入されたと言っても過言ではない。それゆえ、歯科医学教育において医療コミュニケーション教育が正式な講義科目として位置づけられ、学生が単なる概念論にとどまることなくロールプレイや模擬患者とのセッションにより実学としてのコミュニケーションを学べるようになったことは画期的だと言える。しかしながら、医療コミュニケーション教育と同様に欧米の歯科医学教育では確立されているにもかかわらず、国内では講義科目としていまだ十分に確立されていない領域に、プロフェッショナルリズム教育がある。今回、医療コミュニケーション教育とプロフェッショナルリズム教育との関係性について紐解き、九州歯科大学で我々が行ってきたプロフェッショナルリズム教育ならびに日本歯科医学教育学会の倫理・プロフェッショナルリズム教育委員会が行ってきた活動について報告する。

#### 1. コミュニケーション教育とプロフェッショナルリズム教育の関係性

コミュニケーションスキルとプロフェッショナルリズムは、それぞれ欧州や米国の歯科学生が歯科医師になるまでに身につけておくメジャーコンピテンスのひとつとしてあげられている<sup>1), 2), 3)</sup>。また、英国の医学教育者 Harden らは医師に求められるコンピテンスを三重の同心円からなる Three-Circle Model で表した。これは中央の円がタスクの遂行能力、その外側の円がタスクの捉え方、一番外側の円はプロフェッショナルリズムを表す。医療コミュニケーションは 2 番目の円 (Approach to tasks) に属し、プロフェッショナルリズムは前述のように一番外側の円 (As a professional) に属している。このようにコンピテンスという観点からみると、両者は異なっている。しかしながら、認知領域、情意領域、精神運動領域という Bloom<sup>4)</sup> の唱える教育目標のタクソノミーでは、コミュニケーションもプロフェッショナルリズムも認知・精神運動領域に属する点もありながら、コミュニケーションには「共感」、プロフェッショナルリズムには「態度」があることから、両者の一部は情意領域に属するというという関連性がある。情意領域を身につける過程は、(受容) → (反応) → (価値付け) → (組織化) → (個性化) という段階を経るが、この情意領域の教